

① 休日  
② 右手  
③ 入力

④ ひとけ  
⑤ あま

② ① イ  
② ア  
③ 耳

④ かわるがわる

⑤ ウ  
⑥ ア

③ ① エ  
② ウ  
③ ア  
④ エ  
⑤ イ  
⑥ ウ

④ ① さんそやえいよう分

② たり

③ イライモノ

④ ア ②  
① イ ①  
② ウ ②

配点	
①	各2点×5=10点
②~④	各5点×18=90点
<計>100点	

① 「目」には「ひ」「にち」「じつ」などの読み方がある。② 「右」は、縦のはらいから書く。③ 「入力」は、コンピューターにしごとをしてもらったための情報を入れることなどを用いる。パソコンで何かを調べるときに、ことばを打ち込むのも入力である。④ 「人気」は「にんき」と読むときと「ひとけ」と読むときがある。「ひとけ」は、人のいる気配。⑤ 「雨」はふつう「あめ」と読むが、下にくることばによって「あま」となる。

②

1 線①をふくむ文は、「顔も日本人にそっくりでしたし……だれも魔法使いだなんて思いません」と書かれている。ということばは、「魔法使いがかぶりそうな帽子」も「日本人がかぶりそうにない帽子」もおかしいということになる。ここでの「あたりまえ」は、ふつうでかわったところがないという意味である。

2 「にたにた」「にまにま」「にやにや」も笑っているようすが、あまり感じのよくない笑い方で、ちょっと意地悪そうだったり、何かたくらんでいそうだったりする。

3 オートバイに乗っているようすを思い浮かべてみよう。右手と左手で、オートバイの両側に突き出たハンドルをにぎっているはずである。だから、ぶたの両側に突き出た何かをつかんでいるにちがいない。

4 「かわるがわる」は、交代に、とか、順番に、という意味である。「大きなぶた」を見て、それから「魔法使い」を見て、それからまた「大きなぶた」を見て……というようすである。何が起こったかわからないのである。

5 ここでいっている「こんなこと」は、今したばかりのことをさしている。第二段落に「日本の人をおどかしたりだましたりするつもりはありません」とあるが、「こんなこと」といっているときにさしている内容とはいえない。すぐ前のところで魔法を使ってしまったことをいっているのだが、ぶたに変わったのはオートバイであって、若い男ではないことに注意しよう。四行前に「若い男は、そのぶたにまたがって」と書いてある。

6 「つい、うっかり」魔法を使ってしまったということである。魔法を使ったところを読むと、「オートバイに乗っていた若い男は、どなりつけました。魔法使いのおじいさんは、びっくりしたひょうしに……魔法を使ってしまうました」と書いてある。

③

体の部分をふくむ慣用語はよく出題される。

① 「目を皿(のよう)にする」は、いっしょうけんめいさがすようす。

② 「耳にたこができる」は、おなじことを何度も聞かされてうんざりするようす。

③ 「足が棒になる」は、足がつかれているようす。

④ 「目がまわる」は、とてもいそがしいようす。

⑤ 「はなを高くする」は、じまんしたり得意そうにしたりするようす。

⑥ 「耳をかたむける」は、注意して聞くようす。

④

1 「さいぼうが生きていくために」必要なものは何かという問いである。つぎの行に「血えきからさんそやえいよう分をもらって」と書いてある。

2 「きみのからだをつくったり、きみをうごかしたり、きみを考えさせ」している」というつながりである。きちんと守っていない書き手も多いが、「たり」を使って、ならべて書くときは、「……たり……たり」のようにセットで使う。

3 「六字」だけにたよってさがすと「たんさんガス」「たくさんの水」などと答えてしまうかもしれない。「たんさんガス」は「はくいきのなかにまじ」って出ていくものである。「たくさんの水」は、③といっしょに血えきから出てくるものである。③のすぐ前の「そのほかの」は「たんさんガス」のほかの、ということばで、「たんさんガス」は「イライナイモノのひとつ」とされていた。

4 アについて、「たんさんガス」は「はくいきのなかにまじ」って出ていく。ウについて、「さいぼうのなか」の「イライナイモノ」が「さいぼうからぬけだして血えきのなかにはいる」のである。